

SDGs の世界観に基づく 持続可能な社会とは

田瀬 和夫

昨今の日本では、「持続可能な開発目標 (SDGs)」に対する認知度がますます高まり、企業や地方自治体の方針策定、学校教育などさまざまな文脈において、具体的なアプローチの模索がなされています。しかし、17のゴールを個別具体的にしているだけでは、SDGsの本質をとらえることは残念ながらできません。

SDGsの前文や宣言に散りばめられているキーワードから、国際社会は「すべての人が (leave no one behind)」「世代を超えて (generations)」「自分らしく (in larger freedom)」「よく生きられる (well-being)」「インクルーシブ (inclusion)」な世界を目指していると考えられます。SDGsは国際社会が模索し続けてきた人類の共存のあり方について、平和、開発、人権、環境保護等に関する取組を統合する枠組みとして構築されたものです。

SDGsの描く世界観の中でも、本号のテーマを考えるにあたって重要となるのが、SDGsの「誰ひとり取り残さず」という文言の基礎になっている、「人間の安全保障」です。

社会が戦争や災害などの危機的な状況に陥ると、女性を含めた社会の構造的差別により脆弱な環境に置かれやすい人々に対して、生存や尊厳を脅かすリスクが特に高まります。このようなリスクに個々人が対応するべく人間の安全保障では、組織全体の制度や規範の整備により人権や尊厳を守るというトップダウンの視点と、人々の潜在能力(ケイパビリティ)を伸ばし、さまざまな困難な状況に対して立ち直る力(レジリエンス)を身につけるというボトムアップの視点の両面からのアプローチで挟み撃ちをすることが必要とされます。この二つのアプローチのもとで、家庭内役割分業の見直しや女性の権利保護を強化する規範づくりとともに、女性が意思決定プロセスに参画でき、自らの潜在性を発揮できる環境づくりが平時の段階から求められるのではないのでしょうか。このように、SDGsの世界観と思考は非常に有用であると言えるでしょう。



PROFILE

たせかずお：東京大学工学部卒。1992年外務省入省。2001年より2年間、緒方貞子氏の補佐官として「人間の安全保障委員会」事務局勤務。その後、国際連合事務局、デロイトトーマツコンサルティングの執行役員を務め、2017年に独立しSDGパートナーズ設立。現在、事業会社であるSDGインパクト、Think Coffee Japan(株)含め計3社の代表取締役。私生活では9,000人以上のメンバーを擁する「国連フォーラム」共同代表理事。